

参加者募集要項

海外事情研究所主催・高大連携事業

東京外国語大学 夏期世界史セミナー —世界史の最前線IV—

東京外国語大学では、本学の世界各地域の歴史学担当スタッフによる最新の研究成果を公開するとともに、高校で世界史教育を担当する先生の方々との対話を通じて世界史教育に新たな視座を示すことを目標に、今年度も2日間のセミナーを実施します。今年は2日目の昼休みに意見交換会も設けますので、その機会に日ごろの世界史教育での悩みなど一緒に考えていきましょう。皆様のご参加を心よりお待ちしております！

尚、8月3日(金曜日)9時半より全歴研の講演もあります。こちら是非ご参加ください。

2012年8月3日(金)～4日(土) 東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟 115(予定)

プログラム ※今後の調整によって、多少、変更になる可能性もありますので、ご了承ください。

1 日 目	3日(金)	13:30～14:00	受付
		14:00～14:10	海外事情研究所所長挨拶(鈴木茂)
		14:10～15:10	「アラブの春」のその後： 絡み合う紛争がもたらす「民主化」の阻害(青山弘之)
		15:10～15:30	質疑応答
		15:30～15:50	休憩
		15:50～16:50	「近世日本における差別と地域社会」(吉田ゆり子)
		16:50～17:20	質疑応答
2 日 目	4日(土)	09:00～09:30	受付
		09:30～10:30	「東南アジアを中心として見た7～9世紀の仏教世界」(青山亨)
		10:30～10:50	質疑応答
		10:50～11:10	休憩
		11:10～12:10	「ホロコーストとマイノリティ： 両大戦期中欧の世界史的変動」(相馬保夫)
		12:10～12:30	質疑応答
		12:30～14:00	質疑応答昼休み意見交換会・懇親会(学生会館ホール)
		14:30～15:30	「フランス植民地における農村の変容と「文明化」 ～チャド共和国の事例から～」(坂井真紀子)
		15:30～15:50	質疑応答

8月3日(金曜日)9:30～11:00 全国歴史教育研究協議会東京大会特別講演 場所 研究講義棟 115

「赤道の南には過ちはない：南大西洋と世界史」(鈴木茂)

入場無料！

参加条件・申込み方法等

日程 2012年8月3日(金)、4日(土)(2日間)

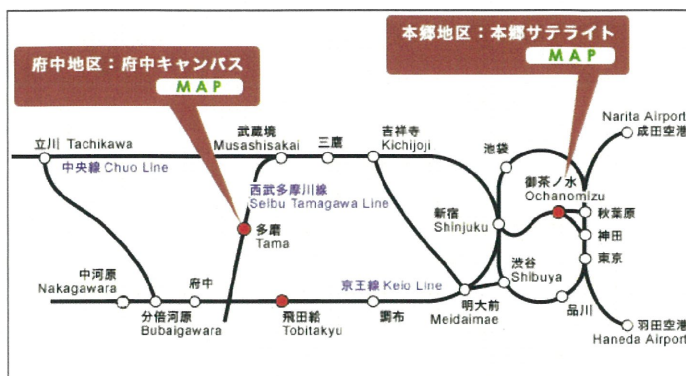
会場 東京外国語大学 府中キャンパス
 (東京都府中市朝日町 3-11-1)
 西武多摩川線「多磨」駅より
 徒歩5分、
 又は京王線「飛田給」よりバス

対象 高等学校、
 予備校の世界史担当教員

受付期間 2012年7月13日(金)まで

受講料 無料
 懇親会 無料

応募方法 同封しました申込書をFAXにてお送り
 ください。同じ高校で複数の方が申し込
 まれる場合は、申込書をコピーして
 ご利用ください。
 なお、宿泊が必要な方は、事前に宿泊
 先を確保した上でお申し込みください。



[お申込み先]

東京外国語大学 総務企画課広報係
 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
 TEL:042-330-5150
 FAX:042-330-5140

[お問い合わせ]

鈴木茂(海外事情研究所所長)
 ifa@tufs.ac.jp

[企画・運営]

東京外国語大学 海外事情研究所
<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ifa/index.html>

青山弘之「アラブの春」のその後：絡み合う紛争がもたらす「民主化」の阻害
2011年以降の中東地域は「アラブの春」と呼ばれる政治変動によって多いに注目を浴びた。チュニジア、エジプトで大統領が退任した当初、この動きは「民主化」、「フェイスブック革命」などと高く評価された。しかし、リビアへのNATOの侵攻、バハレーンへのGCCの介入などを経て、次第にその様相を変化させ、最近では地域の政治的不安定化や国家破綻といった問題が生じている。こうした状況はなぜ生じたのか？

本講義では、現在内外のメディアでもっとも注目されているシリアに焦点を当て、同国が長年にわたって身を置いてきたアラブ・イスラエル紛争と「アラブの春」がどのように絡み合っているのかを解明する。

吉田ゆり子「近世日本における差別と地域社会」

東日本大震災依頼、とりわけ地域の一体感、人々のつながりの大切さが、改めて注目されている。伝統的には共同体が、人々の生活や意識を規制する反面、生産と生活を支えるセーフティネットの役割を果たしていたともいえる。そうした人々のつながりや共同性を、歴史的に地域社会に即して考える時、そこには百姓や町人といったいわゆる「土農工商」ではとらえられない多様な人々の存在がみえてくる。正月の祝福芸である万歳や猿回しを行なう芸能者は、日常的には百姓たちの生活を守るために、村の番人や遺体の埋葬を担うことを強いられるマイノリティーであった。こうした周縁的な人々に注目し地域社会を捉え直すことにより、人々の生産と生活を支える地域社会の総体がはじめてみえてくる。これは、日本社会に固有な問題をあぶり出すとともに、人類に普遍的な共同性のあり方を考える素材となるものと考え、とりわけ信濃国を素材として、「鼯」と「猿牽」と地域社会との関係を論じていきたい。

全国歴史教育研究協議会東京大会特別講演

鈴木茂「赤道の南には過ちはない：南大西洋と世界史」

新大陸「発見」については、南半球の影が薄い。コロンブスが最初に到着したのはカリブ海の島々であり、その後のスペイン植民地の中心はメキシコとペルーで、ペルーですらスペインとの交易路はパナマ地峡経由であったことから、16世紀の大航海時代に、赤道以北の大西洋が果たした役割に注目が注がれてきたのは仕方がないことかも知れない。18世紀に最盛期を迎える黒人奴隷貿易では、奴隷供給地として赤道以南のアフリカが登場するが、送り出し先としてカリブ海や北米が強調されがちで、どうも南大西洋の存在感は希薄であるようだ。この報告では、16世紀以降、南大西洋が世界史的な出来事とどう係ってきたのかに焦点を当て、近代世界形成における大西洋の役割について再考したい。

プログラム2日目

青山亨「東南アジアを中心として見た7~9世紀の仏教世界」

唐の仏僧義浄は、25年間にわたって東南アジアを含む30以上の国々を巡ったのち、695年に帰国して多数のサンスクリット経典を持ち帰りました。それから半世紀を経て、奈良の東大寺で大仏開眼会が挙行された752年頃、東南アジアのジャワ島ではボロブドゥールの建設が始まろうとしていました。それからさらに半世紀を経た806年になると、中国から帰国した空海が日本に真言密教の基礎を築きますが、ちょうどその頃ボロブドゥールは完成しました。この世界最大級の仏教建造物には密教の要素も組み込まれています。興味深いことに、空海の密教の教えには東南アジアを経由してインドから中国に渡った金剛智の教えが含まれています。

このように、世界史における東南アジアの仏教は大乗仏教の発達と深く関わっており、「南伝仏教」という概念では一括りにできません。また、大乗仏教と対をなす「小乗仏教」という用語も「上座部仏教」と言い換えるだけで片づくものではありません。この講義では大乗仏教が展開した7~9世紀の東南アジアを再検討することで、上座仏教とイスラームが広がる以前の東南アジアにおける大乗仏教のダイナミズムを理解することをめざします。

相馬 保夫「ホロコーストとマイノリティ：両大戦期中欧の世界史的変動」

ナチ・ドイツが、第二次世界大戦下、ヨーロッパ全域に広がるユダヤ系住民およそ600万人を大量虐殺したことはよく知られています。しかし、ナチスが迫害し殺害した人たちはユダヤ人だけでなく、社会主義者・共産主義者などの政治的な敵、シンティ・ロマ、精神障害者、遺伝病者、同性愛者や「反社会的分子」、それに東欧諸地域のスラヴ系諸民族にまで及んでいました。それは、内に対しては「共同体異分子」をあぶりだして「国民=民族共同体」を統合させる政策の一環であると同時に、外に対してはドイツ系の人たちを本国に帰還させる一方で、ユダヤ系・スラヴ系の人たちを排除・抹殺し、「アーリア人」の支配する帝国をつくりあげるという東部「生存圏」政策と関連していました。ここではこうしたホロコースト問題を両大戦期のマイノリティ問題と関連づけ、この時期の中欧の世界史的変動について明らかにしたいと考えています。

坂井真紀子「フランス植民地における農村の変容と「文明化」

～チャド共和国の事例から～

産業革命による資本主義システムの拡大に伴い、ヨーロッパ列強によるアフリカ諸地域の植民地政策は19世紀後半より本格化していく。ヨーロッパ列強がアフリカの農村において導入した、綿花、カカオ、ゴム、コーヒーなどの換金作物栽培による「近代的農業」は、伝統的な農村の風景を解体していったが、ここには経済的な搾取と同時に「文明化の使命」という合理化された大義が埋め込まれている。現地に足を踏み入れたヨーロッパ人は一様に、農村部の「貧しさ」に驚き、医療の不足や農業技術の遅れに心を痛めた。この心象風景は時代を超えて、現代の「開発」的価値観へとつながっているように思われる。本発表では、仏領赤道アフリカに属していた現チャド共和国の事例を取り上げ、植民地期の農村部における変容を、綿花の強制栽培と「文明化」の関係を軸に考察し、「近代化（＝開発）」を再考する一助としたい。